

第26回KCELS大会を終えて

鷗野ひろ子

今年度のKCELS年次大会は12月7日に開催されました。今回は、卒業生でしかも本学名誉教授であられ、現在日本アメリカ文学会会長、松山東雲女子大学学長であられる別府恵子先生にご講演をお願いいたしました。ご講演の題目は「もう一つのジャズ・エイジ：エドナ・セイント・ヴィンセント・ミレイの1920年代」で、当時、女性詩人に対する偏見の中で、また具象的自由詩が主流を占めていた中で、伝統的な定型詩ソネットを書いたエドナ・セイント・ヴィンセント・ミレイがなぜ人気を博すことができたかをいろいろな面から分析し、あらためて彼女の詩の魅力を紹介していただきました。

研究発表の部では、ノッティンガム大学およびサセックス大学で修士号を取得後、本学大学院博士課程在学中の山内理恵さんが『嵐が丘』のネリーの語りについて、次に本学卒業後、ロンドン大学で博士号を取得、現在上智大学などで非常勤講師として活躍中の大山みこさんがOHPを使って日英広告における映像の方向性について、興味深い分析を展開なさいました。

どれも興味深く、示唆に富んだもので、大変充実した大会となりました。特にこのような立派な先輩たちの姿は在學生に大変な刺激と励ましとなりました。あらためて別府先生、大山さん、山内さんに、感謝申し上げます。

もう一つのジャズ・エイジ：エドナ・セイント・ヴィンセント・ミレイの1920年代

別府恵子

アメリカ文学史のなかの1920年代

「都市とアメリカ文学」と題する講演（1985）でアーヴィング・ハウはアメリカ文学史のなかの二つの重要な時代として、「1840～50年代の<sup>トランセンデンタリスト</sup>超絶主義者たちの時代と1920年代」を挙げる。第一次大戦後、アメリカは一躍、世界経済と国際関係の中心となり、国内では大量生産、



大衆消費経済・文化の出現をみた。現在の超大国アメリカの始まりが1920年代といえる。また、1848年に始まる第一次フェミニズム運動は女性参政権の発効（1920）で決着をみ、女性の社会参加が活発になる。フラッパーとよばれる女たちが、フロイトを読み、公然とセックスを語り、お上品な伝統や因習に挑戦的態度をとった「性の開放」の時代である。しかし、彼らの担った象徴的な役割は既成の性道徳の打破と消費社会の顕示であったことを考慮すると、フラッパー＝「まだ十分に飛べない雛鳥」とは皮肉のきいた呼称である。1920年代＝ジャズ・エイジの名付け親フィッツジェラルドは、「ジャズ・エイジの特徴は、政治には全く関心がなかったこと…それは、驚異の年代、芸術の年代、過剰の時代、諷刺の年代」（“Echoes of the Jazz Age” [1931]）という。文学においては「散文ではフィッツジェラルドとヘミングウェイ、詩ではミレイ」といわれた1920年代だが、後の文学史のなかでのミレイの存在が薄い事実注目して、ミレイの生涯と詩作品をとおして、1920年代を考察したい。

詩人エドナ・セイント・ヴィンセント・ミレイ

(1892～1950) の1920年代

1918年に発表されたミレイの詩行、「わたしの蠟燭は両端から燃える／一晚はもたないわ／でも、私の仇私の友よ／見て欲しい、その見事な輝きを」がジャズ・エイジの合い言葉となり、ミレイは一躍時代の寵児となる。ともすれば、ジャズ・エイジの文化表象として片づけられるミレイだが、じつはそうした役割を演じながら、

したたかに詩作=美の創造を人生の仕事としたのが、エドナ・セイント・ヴィンセント・ミレイという詩人であると主張したい。2001年夏、前後してミレイの伝記が二冊出版された。ゼルダ・フィッツジェラルドの伝記作家として有名なNancy Milfordの*Savage Beauty*とDaniel Mark Epsteinの*What Lips My Lips Have Kissed*である。

ミレイはメイン州の海辺の町ストックランドに生まれる。食物にも事欠く毎日、住む場所を転々とする幼年期を送る。しかし、母コーラは貧しくとも娘たちに精神的には貴族のような生き方、素養を身につけるよう教育する。とくに、エドナには古典文学やクラシック音楽、すべて一流のものを与えた。「母が私に詩をくれた」と回想するように、ミレイは幼い頃から日誌や詩を書き、想像世界の恋人に語りかけて成長した。20歳の時に書き始めた、ヒロイック・カブレットで書かれた“Renaissance”は、*The Lyric Year*の“best poems of the year”に選ばれる。ミレイが詩を朗読するのを聞いて才能を見込んだ篤志家の好意で、彼女はヴァサール・カレッジに進学する機会を得る。

#### 「わたしはカオスを14行の詩におさめる」

1923年には、*The Harp-Weaver and Other Poems*で女性詩人としてはじめてピューリッツァ賞を受賞。その後も詩作に、自作の詩の朗読会、またプロヴィンスタウン劇団のために戯曲を書いて多忙で充実した20年~30年代を過ごす。ミレイの200編におよぶソネット群は、自由奔放に生きる魂の叫びを伝統詩形におさめるという情熱と理性の結晶の証しであり、同時代のドロシー・パーカーのシニズムやウィットだけの戯れ詩とは一線を期すのがミレイの詩風である。「政治には無関心」といわれた1920年代だが、ミレイは社会や時代状況にも敏感で、*Aria da Capo* (1923) は反戦劇として好評を博した。1921年二人のイタリア系移民を巻き込んだサッコ・ヴァンゼッティ事件を、ウィルソン大統領は「アメリカの政治、社会制度を根底から問う」事件であると断言。1927年、彼らの処刑にはミレイも先頭に立って抗議をした。“Justice Denied in Massachusetts”は、翌年出版の詩集に収められたほかの詩も含めてアメリカの良心を問う詩作品である。

1950年、ミレイは58歳で死すが、その人生は詩作=美の創造がすべてだった。数多い恋愛もすべて詩神を招くためのものだったとしても過言でない。ミルフォードの伝記のタイトルのようにミレイは「残酷な美神」だった。死後出版されたソネット “I will put Chaos into fourteen lines”は、まさに波瀾万丈の詩人の生を要約するものだ。

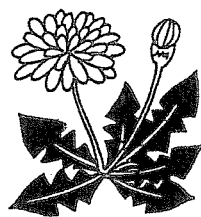
## 『嵐が丘』：偵察するネリー

山内理恵

『嵐が丘』のネリーの語りは、真実を伝えるよりも、彼女の都合に合わせて操作されている部分が多い。このことは、John Mathisonをはじめとして、多くの批評家達が指摘している。ネリーは、主人家族の子供たちの遊び相手として、主人家族の一員のような幼少時代を送った。成人し、召使として扱われるようになってからも、主人家族の一員としての意識とプライドとを持ち続け、コミュニティでの影響力を維持した。今回の発表では、そのような立場の彼女が、自分の生活を守るために、周囲を偵察する様子をまとめてみた。

他の召使達は、機械的で自己主張が無く、主人家族の事情にも無関心である。それと比べ、ネリーは、主人に楯突いて意見を主張し、家族にも干渉しようとする。没個性的な月並みの召使と同様に扱われることを拒絶するのだ。周囲の人々を鋭く観察し、彼らの行動と状況とを敏感に把握して、時には援助したり、時にはわざと困らせたりして、家の中で力を得ていく。偵察によって影響力と生活の安定とを守ろうとするのだ。リントン家の不幸を企むヒースクリフや、隠れてリントンと交流を持ち、知らずにリントン家に禍を招こうとするキャサリン2世の行動を見破るために、偵察の目を鋭くする。このことが、語りに緊迫感と臨場感とをもたらす。また、ロックウッドに全てを語ることで、彼女は彼をキャサリンと結婚させて自分を雇わせ、召使としての生活を安定させようとしている。

このような、特殊な事情をもつネリーが語りを務めることは、視覚的に線密で緊迫感のある語りを生み出す。それだけでなく、鋭い観察力にもかかわらず、彼女がしばしば状況を読み誤ることで、人間の観察力の限界と、人間の観察力を超える人間性の深遠さとを、巧みに示唆している。



## 日英広告における映像文法

大山 るみこ

情報の映像化時代—インターネット等の普及により情報に占める映像の割合は増加傾向にあり、言語と映像が共存するテキストを扱う機会も増えている。当研究発表では、これらのテキストを「読む」際、避けては通れない映像分析について、日英の広告を例に考えてみた。映像を主観、直感的解釈の対象ということだけでなく、より体系的に分析の方法論という側面からとらえる試みである。つまり、言語に文法があるように映像にも「文法のようなもの」を考えることはできないかという問題から出発、またその「文法のようなもの」に文化的普遍性、差異がみられるかどうかにも着目してみた。

出発点としては言語も映像も意味形成のための、またはコミュニケーションを可能にする記号の一種だというスタンスをとる。ここでは映像のあらゆる「内容」よりもそのテキスト中の映像がどのような構造をもっているか—visual syntaxと呼ぶ—に焦点を絞ることにした。具体的には映像項目のもつ方向性と映像項目がテキスト中のどの位置にどのような意味をもって配置されているかという2点について分析考察した。

映像の方向性に関しては、とりあげた日英の広告の例ではプラスの意味を表象する方向性が異なっていた。日本の例では右から左、英国のものでは左から右という方向性である。また、テキスト中の映像項目の意味配分においても日本のものが時間的推移の概念を右—左の意味配分で示すのに対し英国の例では左—右となっていた。

これらの差異が示すものは文化記号論的に何か。そこで映像と言語という2つの記号を関連させて仮説を立ててみた。それは日本語と英語の表記方法と映像の方向性、テキスト中での映像項目と意味配分の関連性である。つまりテキスト全般の意味形成を担う記号間の相関性である。この仮説は今後、コミュニケーションを記号という概念から考えていく上での考察、研究の一側面となりうるのではないだろうか。なぜなら言語が文化を表象するように映像も文化を表象する記号であるからである。

### キャンパスニュース

#### <退任>

伊藤栄子教授 定年退職・名誉教授  
Catherine A. Vreeland(Broderick)教授 定年退職・名誉教授  
Philip P. MacLellan専任講師 (外国人2年契約教員)  
正木(勝谷)芳子専任講師

#### <2002年4月より就任>

吉田純子教授 現在、広島大学 総合科学部 教授  
立石浩一助教授 現在、京都外国語大学 外国語学部 助教授  
栗栖和孝専任講師 新任  
Paul K. Maeker専任講師(外国人2年契約教員・MacLellan  
専任教員後任)

### 国際学会発表

#### \* 平井雅子氏

イタリア、ナポリ大学で開催されたICDHL、国際ロレンス学会(2001年6月12~16日)にて研究発表。

#### \* 小杉 世氏

ウェールズ大学、Bangorで開催された第11回ヴァージニア・ウルフ国際学会(2001年6月13~16日)にて研究発表。

#### \* 三宅伸枝氏

アイルランド、Dublin City Universityで開催されたIASIL, The International Association for the Study of Irish Literatures(2001年7月30~8月3日)にて研究発表。

#### \* 鶴野ひろ子氏

ノールウェイ、Trondheimで開催されたThe Emily Dickinson International Conference "Zero at the Bone: New Climate for Dickinson Study"(2001年8月3~5日)にて研究発表。

#### \* 山田由美子氏

スペイン、Valenciaで開催されたWorld Shakespeare Congress(2001年4月18~23日)にて研究発表。  
ドイツ、Gleimhaus Halberstadtで開催されたInternational Symposium of Connotations(2001年8月5~9日)にて研究発表。

### 記念賞

2001年度以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

大沢幸恵記念賞 E99112 阪上佳子  
デフォレスト記念賞 E99003 有田晴美

### 会員による出版紹介

- ◇別府恵子氏 『アメリカ文学ミレニアム』I & II (共著、南雲堂 2001年12月刊)
- ◇鶴野ひろ子氏 "Trees in the Poetry of Yeats and Pound." *Paideuma: A Journal Devoted to Ezra Pound Scholarship* 28 : 2-3 (2000.12) : 133-148. (単著)
- ◇山田由美子氏 『シェイクスピアを読み直す』 (共著、研究社 2001年10月刊)

## 神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年4月1日施行)

- (1) 名称  
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的  
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成  
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動  
年一回、英文学会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。  
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。  
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

### 編集後記

英文学科では昨春、新たにグローバル・コミュニケーション・コースを作り、順調に1年が経ちました。より学生のニーズに応じたカリキュラムを検討中です。このNewsletterを作るにあたり、多くの方々からのご協力を頂きました。ありがとうございました。

### KCELS Newsletter 編集委員

(2001年度運営委員)

◇C. Seton ◇鶴野ひろ子 ◇和気(直田)節子 (ABC順)

### KCELS Newsletter No. 17

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel.(0798)51-8548 Fax(0798)51-8532

2002年3月発行